

スローライフ学会だより

発行：NPOスローライフ・ジャパン（スローライフ学会事務局） 2010年1月3日NO.12

〒102-0085 東京都千代田区六番町6-1 パレロワイヤル六番町310 ☎03-3221-5113 fax03-3221-5114

<http://www.slowlife-japan.jp/> E-mail:slowlifej@nifty.ne.jp



新年、あけましておめでとうございます。

今年もスローライフで行きましょう！

昨年は、区切りの年でした。筑紫哲也さんを亡くした後、NPO スローライフ・ジャパンに新しい理事が何人も加わりました。スローライフ学会には増田寛也さんが会長に就きました。新体制を整えて、みんなでなんとか乗り切った1年でもありました。

それでも「筑紫哲也賞“スローライフの眼”作文コンクール」には、全国から力作が集まりました。10月からの「スローライフ月間 in 淡路島」では、これまでにないさまざまなチャレンジができました。フィナーレ 12月の「淡路島スローラフ・フォーラム」には、多くの方が参加され、大成功を収めました。夏から始めた「さんか・さろん」では、毎月ユニークな話題が膨らんでいます。

さあ、今年は何？・・・。ゆっくりながらも、みなさんと一緒に、力強く歩んで行きたいと思っています。よろしく願いいたします。

<淡路島報告>

メッセージイベント

「スローライフ月間 in 淡路島」は2009年10月7日～12月6日まで行われました。なかでも、スローライフ学会のメンバーと淡路島の皆さんとで創りあげた場がここにご紹介する4つの催しです。メッセージ性の高い、実験や連携となりました。



1 「スローライフ・スポーツ」

大阪のNPO法人フレンドリー情報センターは、全国へスローなスポーツを広めています。南あわじ市、鳴門市、東かがわ市の3市による「ASAトライアングル物産展」の中で、体験コーナーを設けました。南あわじ市・農業公園イングランドの丘を会場に、スポーツ輪投げやトランポピクスを楽しみました。(2009年11月3日)



2 映画会「1000年の山古志」

阪神・淡路大震災に次ぐ被害をこうむった中越大震災。それから5年、山古志村の農民魂を描いたドキュメンタリー映画「1000年の山古志」が完成。同じく震災から立ち上がった島と村、ともにがんばろう!のメッセージをこめて。淡路市・北淡震災記念公園セミナーハウスを会場に上映。200人近い方々が熱心に鑑賞しました。(2009年11月22日)



3 「スロースタイル・サイクリング」

静岡県掛川市のNPO法人スローライフ掛川は、身近な里山をゆっくり走る「ガイドサイクリングツアー」の活動をしています。掛川市を朝5時に出発し、バスに自転車を積み込んで淡路島へ走りやってきました。地元の産物お線香工場や瓦のアーティストを訪ねたりもしました。淡路島を一周するサイクリングは“淡いち”と呼ばれて人気ですが、地元島内にはサイクリング愛好者が少ないとか。この実験で、淡路島を地元の方とゆくりと走ることが、今後の観光資源になることも確認できました。一緒に走ったり、懇親会に参加したり、伴走車を出してくださった地元の方々これからもよろしく!(2009年11月26・27日)

4 「ダンボールハウスづくり」

全国各地のスローライフ月間に“おっかけ”のようにやってきては、地元の子どもたち、建築士の方々とダンボールで建築をつくる「ラーン・ネットワーク」(静岡県掛川市の建築士集団)が淡路島でもワークショップ。たくさんの子どもたちがダンボールで“橋”をつくりました。淡路島の建築士の方々もご苦労さまでした。会場は南あわじ市・三原ショッピングプラザパーティ(2009年11月29日)



＜淡路島スローライフ・フォーラム報告＞

「スローライフ月間 in 淡路島」の最後を締めくくったのが、「淡路島スローライフ・フォーラム」。3つの分科会と全大会が行われ、延べ400人の方々が、「島に学ぶ」のテーマのもと、話し合い、交流しました。各参加者数は申し込み人数で、実際はもっとたくさんの方が参加されています。

南あわじ分科会

・テーマ：「空き地で交流・空き家に定住」

～島には可能性がいっぱい～

- ・日時：12月4日(金) 14:00～16:30
- ・場所：南あわじ市「サンライズ淡路」
- ・参加者：72名（県内55人、県外17人。）



中川宜昭さん（観光ボランティアぬぼこの会代表）南あわじ市沼島の空間を生かして“自分を見つめる時間”を提供したい。補助金に頼らないこと自力でできることから。



村河勝信さん（就農希望新住民）西ノ宮市から移住。空いている田を借り、耕作放棄地を開墾。公の仕組みや地元の人々の指導で農業を目指す。



村河仁美さん夫の第二の人生へのチャレンジを応援している。何もしないより、何かしたほうが必ず結果がでる。



松本由利さん（TEAM GEAR 主宰）仙台から雲仙市千々石（ちじわ）に移住。地域には居場所と出番が大事、空き家を借りて改修して拠点とした。まちを活用する人を増やすこと。



前川啓治さん（筑波大学人文社会科学部教授）お試し居住を進める土地もある。里山の空き家と商店街の空き店舗などを統合して動きを起こしていく、ネットワーク視点が必要。



コーディネーター 斉藤 睦さん（地域総合研究所所長） これまでは都市に人が流れ男女の暮らしのモデルもあったが、今は変わり目。定番はなく、いろんな人がいろんな場所で暮らす。ただ、どこに住むのかは、何のために生きるのか、どう生きるか、そのあとにその選択があるはず。家、土地を活用することは、手段であって、生き方が大切。そういうことも含め、空き地や空き家利用のための公のワンストップサービスの機関の設置と活躍に期待したい。

※朝日新聞コラムニスト早野透さんはじめたくさんの方から意見が出ました。

<淡路島スローライフ・フォーラム報告>

淡路分科会

・テーマ：「限界集落ではない、元気集落だ」

～物差しを持ち替えよう～

・日時：12月5日(土) 14:00～17:30

・場所：淡路市 「仁井公民館」

・参加者：40名（県内32人、県外18人）

まずは仁井集落をみんなでウォーク。地元の方々がていねいにご案内くださいました。農家からシイタケを分けていただいたり、小豆とズイキを使った地元の味「ちょぼ汁」をみんなでおやつにしたりしました。



コーディネーター 生源寺眞一さん（東京大学農学部長） 実態経済、実物経済になりつつある。ものをつくることが評価されている。また、都市部にない農村地域の共同の力にも注目が。昔は閉鎖的だった農村も変化し、インターネットで交流ができる。そんな農業農村へ若い人たちも興味を持ちだした。こんなことが元気のもととなる。



人形寺祥弘さん（仁井地域交流広場推進委員会会長） 小さな催しに顔を出すだけでも変化する。今日が出発点として、これからの仁井をつくりたい。



河本大地さん（神戸夙川学院大学講師） 農村集落、多様な地域の“教育力”

に注目すべきだ。みちくさをして

転げまわって覚えることがある。

神戸とみ子さん（ふるさと再生仕掛人・群馬県南牧村） “田舎



さみっと”をやった。「駄目だ」と思わず、「やるっきゃない」という行動を起こすこと！

坪井ゆづるさん（朝日新聞編集委員） 行政に

頼らずに住民パワーを。具体的成功例を参考に。淡路島はいいところだが、個別の問題には時間がない。



※とにかく自分の地域を“好き”といおう！という発言が強く残りました。

<淡路島スローライフ・フォーラム報告>

洲本分科会

・テーマ：「島のスローツーリズム」

～海と花と食と。あらためて観光を考える～

- ・日時：12月5日(土) 13:30～17:30
- ・場所：洲本市「洲本市由良交流センターエトワール生石」
- ・参加者：59名（県内46人、県外13人）



本保芳明さん（観光庁長官・当時）

国の政策として観光立国を目指す。人口減はどこもひどい、交流人口を増やさない。特に今後は外国人観光客に期待したい。一方、国内旅行については、宿泊数と滞在時間を伸ばすこと。日本人の仕事の仕方が変わると、これは大きく変わる。今回パネリストとして参加の方々のような地域密着の活動を、どうやって統合していくのが大切。淡路島の人々が本当に島のことをよく知り、島をこうしたいという想いがホスピタリティであり、リピートに繋がる。例えば「みけつくに」

というキャッチフレーズなども、地元が本当に理解できていることばであるのか。地元と外の見方が違うのはあたり前、そのギャップを知ること。外の視点でどのくらい客観視できるかが重要。地域をつくるのは人、観光地をつくるのは人。



白井 操さん（料理研究家）

食に関係なかった男性たちも、暮らしに興味を持ち出した。地産地消、人の気配が大事。世界に誇るタマネギ収穫の楽しみも観光になるはず。



長谷川八重さん（NPO 法人ア-ライフ掛川理事）

掛川から淡路島にサイクリングに来た。観光資源としてサイクリングが有効、暮らし自体も観光になる。地元の人々の日常への遊びの視点が大切だ。

投石文子さん（淡路おみなの会会長）

淡路島は昔、天皇に食材を提供していた『御食国（みけつくに）』。『国生み神話』で、最初に日本に生まれた島。地域学習がさまざまな原点に。

赤松清子さん（NPO 法人あわじFANクラブ）

地元で農業体験を企画し実践中。農家は本気で農業をし、その姿をNPOなどが観光に仕立て、農家の副収入になるようなしくみを作りたい。

コーディネーター 中村桂子さん（JT生命誌研究館館長）

地元の方はあまり気づかないことがあるかもしれない。あるモノを活かす人が、今日は集まった。日本列島も淡路島と同じ島、外国客も含め“リピート”と“滞在”が鍵になる。観光を考えた時、日本人はもっと基本的に遊ぶことを上手にできなければダメ。いずれにしても心、人がこれからの観光の柱になるという結論。



※目の前は海、波音を聞きながら夜遅くまで交流は続きました。

<淡路島スローライフ・フォーラム報告>

全体会

- ・テーマ：島に学ぶ
- ・日時：12月6日(日) 14:00～17:00
- ・場所：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場
地下1階イベントホール
- ・参加者：225人(県内199人、県外26人)

前半は3分科会コーディネーターからののていねいな分科会報告、途中でスローライフ月間全体の報告、その後、淡路島へ各人からの提案がありました。



齊藤 睦さん(地域総合研究所所長・南あわじ分科会コーディネーター) 交流起こしの担い手、エンジンは女性。夢を追う、自分も人も喜ばせる“夢喰い女子”が大切。男性にフォローしてもらいたい。交流には疲れがつきものなので、クッションになる仕組みも。

生源寺眞一さん(東京大学農学部部長・淡路分科会コーディネーター) 背景まで知って食べることが大事。食べ物の流通・購入の仕方は、社会のあり方の鏡。そこに日本のあり方が見える。島ではありながら大消費地と繋がっている淡路島、三毛作という土地利用率日本一の農産物の背後の情報を付加価値にしよう。安心安全はもちろん、環境や働く人の健康に配慮しているなどということが決め手になる。

中村 桂子さん(JT生命誌研究官館長・洲本分科会コーディネーター) 淡路島に学ぶことは多い。自給自足を目指す日本の、ここにモデルがある。日本全体の見本になる。鐘紡跡などの近代化遺産を、今後環境産業までの歴史が見えるように総合的に活かして、未来に繋げるメッセージにしたらどうか。

井戸 敏三さん(兵庫県知事) 歴史、自然、暮らし営み、こうした地域資源をどう活かすかが大切。環境を活かした企業誘致も。交流のパートナーをたくさん作って行って、都会の人が訪ねてくるところにしていきたい。スローライフを実践するには淡路島がいいということが、今回のフォーラムで確認できた。淡路島の魅力を、貨幣価値ばかりに換算しないで、スローライフメジャーで測ると最先端を行っている、ということに自信を得た。



コーディネーター 増田寛也さん

(スローライフ学会会長・野村総合研究所顧問) これからは都会が農村漁村に学ぶ時代。今後の進む方向を、ここで気づいた。島に学んだ。島外の方は、淡路島は一つととらえる。一体としての魅力を出していくことが今後は大事。それには外の厳しい意見も含めて聞いた方がいい。冷静な目で、外の声を聞く。え?と思うことでも我慢して続ける

と本当になっていくだろう。多様な価値観を持ち合い、共有し、尊重するがスローライフ。そんな視点でこうした話し合いを、今後も全国で続けていきたい。

※席が足りなくなりイスを次々と出しながら・・・たくさんのご来場がありました。

＜淡路島報告＞

月間イベント

「スローライフ月間 in 淡路島」の期間中に、淡路島で行われる恒例の催事・祭りなどに加えて、市民グループがスローライフをテーマにさまざまな催しを行いました。パンフレットのイベントカレンダーに紹介しただけでも 83 イベント、地元の NPO 法人あわじ FAN クラブなどは、なんと 10 イベント以上も企画されました。各地にたくさんのスローな催しが溢れました。この写真はごく一部の様子です。



*****ありがとう!*****

東京はもちろん長崎県、鳥取県、富山県、茨城県、静岡県、群馬県など遠くからのご参加ありがとうございました。そしてたくさんの、それぞれの立場の皆さんが支えあったフォーラムでした。また、会いましょう、語りましょう！



<12月さんか・さろん報告>

スピーチ「ワークショップ体験」

川島英樹さん (財)せたがや文化財団

——世田谷パブリックシアターで行われる演劇ワークショップ。

そのワークショップを永く企画・プロデュースしてきた川島さん

に、今回はそのさわりの体験をお願いしました。川島さんがアレンジした現場に、実際に出向く担当のNPO 法人演劇百貨店の大西由紀子さんもファシリテーターとして参加してくださいました。——

(東京「平河町 Mercury Room」で2009年12月15日。写真中央が川島英樹さん、左が大西さん↑)



「せたがや文化財団は区が作った財団で、美術館、文学館、パブリックシアター、生活工房、音楽事業部などがある。自分は20年位パブリックシアターという劇場の担当をしていたが、今は音楽事業部にいる。ワークショップは作業場という意味だが、場そのものをさしたり、やる内容をさしたり、研究集会ともいわれている。いろいろな意味で使われている。主に私がやっていた、パブリックシアターが売

りにしているワークショップを今日はやってみる。数年前から、パブリックシアターは演劇ワークショップをもって、学校へも出かけるようになった。“表現力”“コミュニケーション力”が課題の学校現場でも、ワークショップは取り入れられている。ワークショップと聞いて、今日は皆さん緊張が走っているがご安心を……。」



——この後、輪になって、「イッセーのホイ！」で体の向きを変え、人と向き合ったら自分の居場所を動かすメニュー。「1」「2」「3」と2人が順に言うメニュー。続いて、「1」だけ黙る、高度なメニュー。じゃんけんをして、勝ったら相手の手を握り、負けたら握られないように手を引く、というメニュー。隣の人にインタビューして、それをみんなに披露するメニュー、などを体験。ここまでやって、大笑い、大汗、大仲良しの時

間が流れました。いつものメンバーとこんなに近しく笑ったのは初めて。さろんに参加の方と、こんなにホットに触れ合ったのも初めて。参加者みんなが、一気に家族のような雰囲気になりました。——

「こんな感じでやるのがワークショップ。別に今やった通りのことをしなくてもいい。とにかく、何か事をやるにあたって、こういうことをするのがワークショップの考え方。偉そうな人が上に立って何か言いそれを承る、という関係ではなく、水平な関係。そうした考え方で事を進めようというのがワークショップの精神。だから進行する人は結論を言わない。演劇に限らず、違う局面でも使える。例えばまちづくりなど。誰でも新しいことや何かを始める時は不安、少々不安でも、今の皆さんのような状態で話をすればまた変わるはずだ。」

——この日の忘年会は、当然たいへん盛り上がったのでした。ありがとうございました。——

